

# 数理統計 補助資料 ～線形回帰モデル～

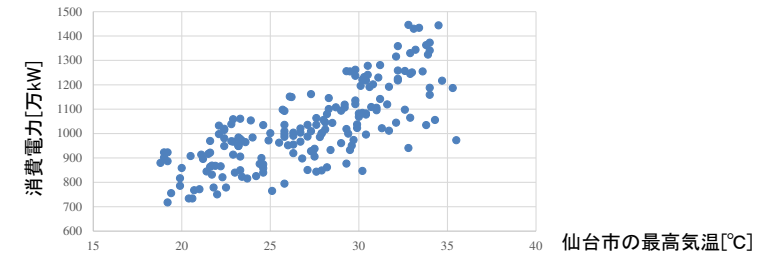
2024年度2学期： 月曜1限, 水曜3限  
担当教員： 石垣 司

1

## 復習：回帰分析の前に

### 基本は「散布図」

- 変数  $x$  (最高気温)と  $y$  (消費電力)の相関関係の可視化  
この関係性を利用した予測や実証の手段が回帰分析



「回帰」とは、目的変数  $y$  の動きを、別の説明変数  $x$  と関数  $f$  で予測したり説明したりすること

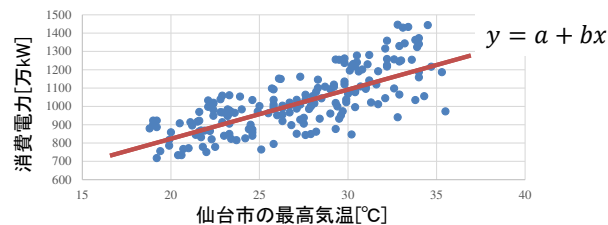
東北電力ネットワーク：東北6県・新潟エリアの2020&21年7月1日～9月30日の各日の12時から13時の電力使用量[万kW]  
<https://setuden.nw.tohoku-epco.co.jp/download.html>  
気象庁：2020&21年7月1日～9月30日の各日の仙台市の最高気温  
<https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/>

2

## 復習：線形単回帰モデル

関数  $f$  に直線を仮定した説明変数が1つだけの回帰分析のためのモデル

$$y = f(x) = a + bx$$



- 因果関係がある場合は、 $x$  が原因、 $y$  が結果の表現
- データ  $\{(x_1, y_1), \dots, (x_N, y_N)\}$  を用いて、散布図の傾向に適合する直線の切片  $a$  と傾き  $b$  を推定
- 切片  $a$  と傾き  $b$  が決まれば、目的変数  $y$  を予測できる

3

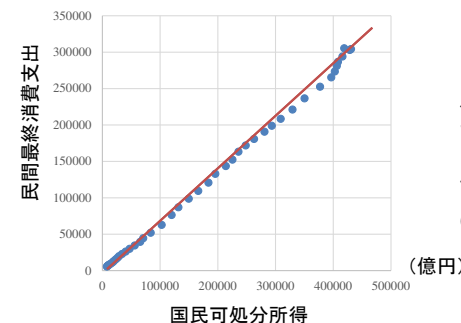
## 復習：回帰分析と予測

回帰式  $y = \hat{a} + \hat{b}x$  を利用した予測

$\hat{a}$  と  $\hat{b}$  はデータ  $\{(x_1, y_1), \dots, (x_N, y_N)\}$  から推定された係数

- $\hat{y}$ : 説明変数  $x$  に対する目的変数  $y$  の予測値

$$\hat{y} = \hat{a} + \hat{b}x$$



問題

左図の回帰係数は  $\hat{a} \cong 0$ ,  $\hat{b} \cong 0.7$  である。国民可処分所得が500兆円するとき、民間最終消費支出の予測値は？

1955年度～1998年度(1968SNA)  
(内閣府 国民経済計算年次推計)

4

## 復習：回帰係数の推定

データから回帰係数  $b$  と切片  $a$  を決定する

- 合理的な基準と手続きに基づいた推定が必要

基準：残差平方和(RSS: Residual sum of squares)の最小化

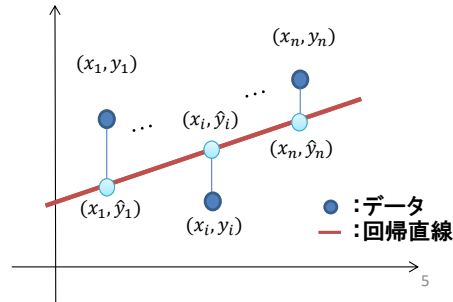
- 残差  $e_i$   $e_i = y_i - \hat{y}_i = y_i - (a + bx_i)$
- 残差平方和  $RSS = \sum_{i=1}^n e_i^2$

手続き：最小2乗法

最小2乗推定量

check!

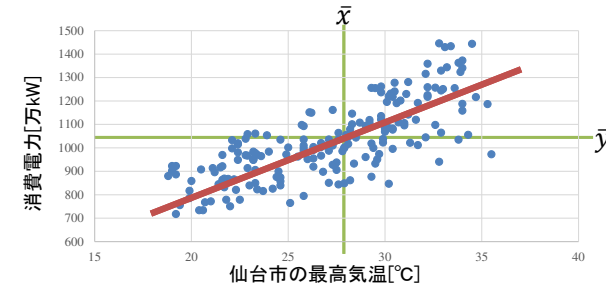
$$\hat{b} = \frac{\sum_{i=1}^n x_i y_i - n \bar{x} \bar{y}}{\sum_{i=1}^n x_i^2 - n \bar{x}^2}, \quad \hat{a} = \bar{y} - \hat{b} \bar{x}$$



## 復習：推定された回帰直線の性質

最小2乗法で推定された回帰直線が満たす性質

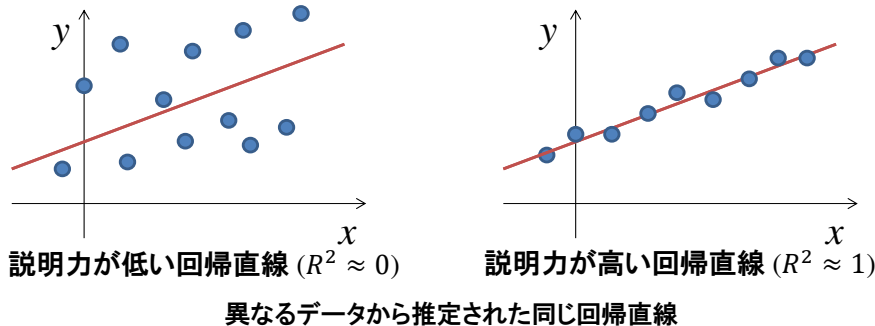
1. 推定された回帰直線は  $(\bar{x}, \bar{y})$  を通る
2.  $\sum_{i=1}^n e_i = 0$  (残差の和は0)
3.  $\sum_{i=1}^n e_i x_i = 0$  (残差と説明変数  $x$  の積和は0)  
残差と説明変数のベクトルは直交する



## 復習：決定係数 $R^2$

単回帰分析の回帰式の適合度 (goodness of fit) の指標

- 同じ回帰式でもデータの説明力が異なる



決定係数  $R^2$  ( $R^2 \leq 1$ )

- 適合度が高いと1に近く, 低いとゼロに近い

## 復習：決定係数 $R^2$ の定義と意味

決定係数  $R^2$  の定義

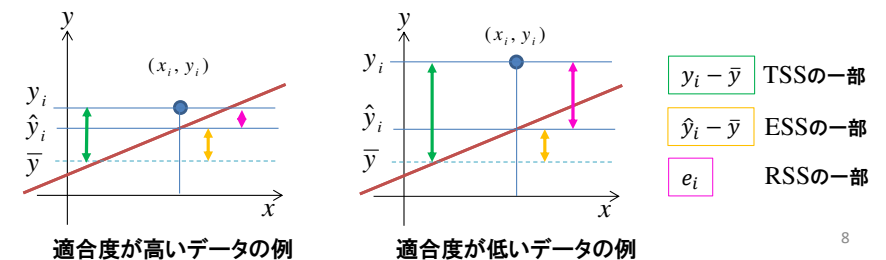
$$R^2 = \frac{ESS}{TSS} = 1 - \frac{RSS}{TSS}$$

全変動(TSS: total sum of squares)  
回帰変動(ESS: explained SS)  
残差平方和(RSS: residual SS)

- 標本分散の分解

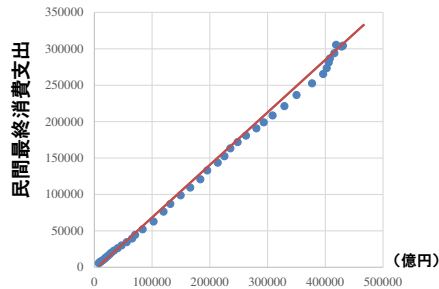
$$\sum_{i=1}^n (y_i - \bar{y})^2 = \sum_{i=1}^n (\hat{y}_i - \bar{y})^2 + \sum_{i=1}^n e_i^2$$

TSS ESS RSS



# 復習：決定係数の例～所得と消費

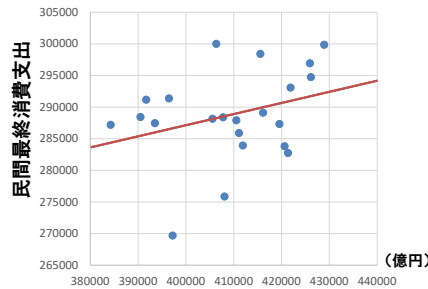
## 国民可処分所得と民間最終消費支出 (内閣府 国民経済計算年次推計)



国民可処分所得  
1955年度～1998年度(1968SNA)

$$\hat{a} = -2950, \hat{b} = 0.698, R^2 = 0.998$$

消費額の全変動の99.8%は  
国民可処分所得で説明可能



国民可処分所得  
1994年度～2015年度(2008SNA)

$$\hat{a} = 215600, \hat{b} = 0.178, R^2 = 0.099$$

消費額の全変動の約10%は  
国民可処分所得で説明可能

$\hat{a}$  基礎消費、  
 $\hat{b}$  限界消費性向

# 線形重回帰分析

## 複数の説明変数による回帰分析

- 目的変数: 変数  $y$
- 説明変数: 変数  $x_1, x_2, \dots, x_p$
- データ:  $\{y_i, x_{i1}, x_{i2}, \dots, x_{ip}\} (i = 1, \dots, N)$
- 偏回帰係数: 係数  $b_1, b_2, \dots, b_p$  (パラメータ)
- 切片: 係数  $b_0$  (パラメータ)

## 重回帰式

$$y = b_0 + b_1x_1 + \dots + b_px_p$$

## 重回帰モデル(データによる記述)

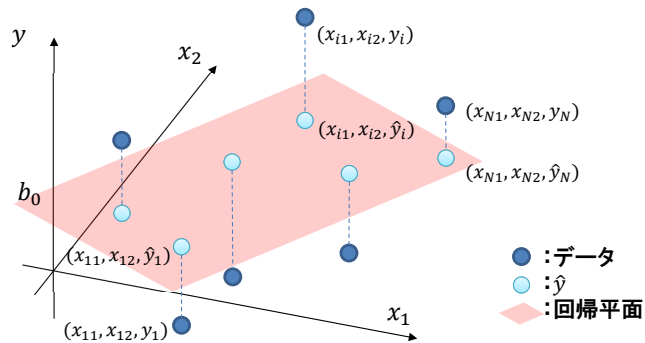
$$y_i = b_0 + b_1x_{i1} + \dots + b_px_{ip} + e_i \quad (i = 1, \dots, N)$$

# 重回帰モデルのイメージ

## 2つの説明変数による重回帰モデルのイメージ

- 推定された重回帰モデルによる予測値

$$\hat{y}_i = \hat{b}_0 + \hat{b}_1x_{i1} + \dots + \hat{b}_px_{ip} + e_i \quad (i = 1, \dots, N)$$



#メモ ここではまだ誤差項  $e_i$  の分布に正規分布を仮定する必要がないことに注意

# 線形回帰モデルと行列

## 線形重回帰モデル

$$\begin{cases} y_1 = b_0 + b_1x_{11} + \dots + b_px_{1p} + e_1 \\ y_i = b_0 + b_1x_{i1} + \dots + b_px_{ip} + e_i \\ y_N = b_0 + b_1x_{N1} + \dots + b_px_{Np} + e_N \end{cases}$$

$$y = \begin{bmatrix} y_1 \\ \vdots \\ y_i \\ \vdots \\ y_N \end{bmatrix} \quad X = \begin{bmatrix} 1 & x_{11} & \dots & x_{1p} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ 1 & x_{i1} & \dots & x_{ip} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ 1 & x_{N1} & \dots & x_{Np} \end{bmatrix} \quad b = \begin{bmatrix} b_0 \\ b_1 \\ \vdots \\ b_p \end{bmatrix} \quad e = \begin{bmatrix} e_1 \\ \vdots \\ e_i \\ \vdots \\ e_N \end{bmatrix}$$

## 線形回帰モデルの行列表現

$$y = Xb + e$$

# 偏回帰係数の推定

## 最小2乗法による残差平方和の最小化

- 残差ベクトル  $e = y - \hat{y} = y - Xb$
- 残差平方和  $RSS = \sum_{i=1}^n e_i^2 = e^T e = (y - Xb)^T (y - Xb)$

## 線形回帰モデルの最小2乗推定量

$$\hat{b} = (X^T X)^{-1} X^T y \quad \text{正規方程式とよばれる}$$

- 最小2乗推定量  $\{\hat{b}_p\}_{p=1, \dots, P}$  は偏回帰係数と呼ばれる  
偏相関係数と同様に、 $p$  番目の説明変数以外の影響を取り除いた場合の、目的変数  $y$  と説明変数  $x_p$  の単回帰係数に等しい

#メモ 推定量  $\hat{b}_p$  は  $X$  と  $y$  の各要素から影響を受けるため、行列とベクトルを使用しないと一般的な表記が困難。早い段階(学部1,2年生)から行列とベクトルの取り扱いに慣れましょう

# 自由度調整済み決定係数

## 定義:

$$\text{adjusted } R^2 = 1 - \frac{\frac{RSS}{N-P-1}}{\frac{TSS}{N-1}}, \quad R^2 = 1 - \frac{\frac{RSS}{N-1}}{\frac{TSS}{N-1}}$$

自由度調整済み決定係数 決定係数

- 決定係数は説明変数の種類 ( $P$ ) の増加で  $RSS$  が単調減少  
説明変数をたくさん利用すると、 $R^2$  は 1 に近い値をとってしまう
- 自由度調整済み決定係数は、 $P$  の増加による  $RSS$  の減少を補正している
- 重回帰分析では、決定係数ではなく、自由度調整済み決定係数で回帰の当てはまりの良さを

# 回帰分析の結果の幾何学的理解～内積と正射影

内積の定義: 2つの  $N$  次元ベクトル  $a, b$  のなす角が  $\theta$  のとき

$$a \cdot b = \|a\| \|b\| \cos\theta = a_1 b_1 + a_2 b_2 + \dots + a_N b_N$$

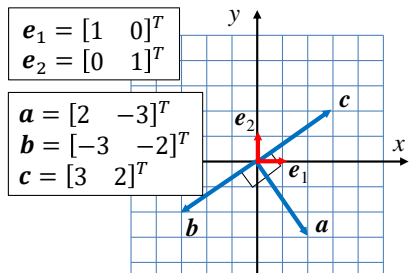
## 内積の性質

- $a \cdot b = 0 \Leftrightarrow a, b$  は直交する
- $a \cdot b = \tilde{a} \cdot b$  ( $\tilde{a}$  は  $a$  から  $b$  上への正射影ベクトル)

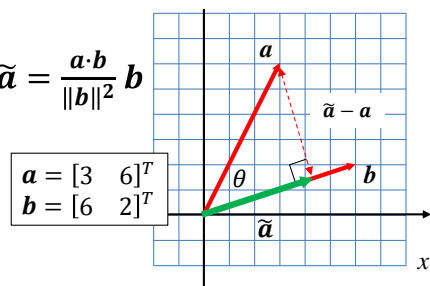
ベクトル  $a$  の指す座標点とベクトル  $b$  上の点で最も距離が小さいのは正射影ベクトル  $\tilde{a}$  の指す座標点

$$\tilde{a} = \frac{a \cdot b}{\|b\|^2} b$$

$$a = \begin{bmatrix} 3 \\ 6 \end{bmatrix}^T, \quad b = \begin{bmatrix} 6 \\ 2 \end{bmatrix}^T$$



直交の例:  $e_1 \cdot e_2 = 0, a \cdot b = a \cdot c = 0$

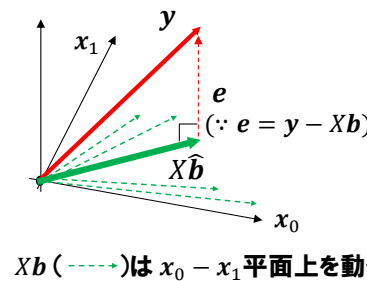


# 回帰分析の結果の幾何学的理解

最小2乗推定の結果は、 $N$  次元空間内のベクトル  $y$  との距離が最も小さくなる  $P$  次元空間 ( $N > P$ ) 内のベクトル  $Xb$  を見つけることと同じである ( $X$  はデータとして与えられているので、 $\uparrow$  を満たす  $b$  を探すことと同じ)

例:  $y = \begin{bmatrix} y_1 \\ \vdots \\ y_i \\ \vdots \\ y_N \end{bmatrix}, X = [x_0 \quad x_1] = \begin{bmatrix} 1 & x_1 \\ \vdots & \vdots \\ 1 & x_i \\ \vdots & \vdots \\ 1 & x_N \end{bmatrix}, b = \begin{bmatrix} b_0 \\ b_1 \end{bmatrix}, e = \begin{bmatrix} e_1 \\ \vdots \\ e_i \\ \vdots \\ e_N \end{bmatrix}$

#メモ より正確に理解するためには線形ベクトル空間、基底、部分空間を張るベクトル、直交などの概念を復習しよう。少し難しいが、より一般的にはヒルベルト空間での直交射影定理により、距離が最小の点はただ一つに定まることが分かる



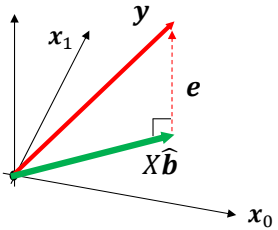
## 【図の意味の説明】

1.  $y, x_0, x_1$  は  $N$  次元空間を動くベクトル
2.  $Xb = b_0 x_0 + b_1 x_1$  なので、ベクトル  $Xb$  は  $x_0$  と  $x_1$  で張られる平面内のみを動く
3. 最小2乗法は  $e^2$  を最小化。これは  $e$  の大きさ、つまり、 $y$  と  $Xb$  の距離の最小化と等しい
4.  $y$  と  $Xb$  の距離が最小のとき、ベクトル  $e$  と  $x_0 - x_1$  平面は直交する。言い換えると、ベクトル  $y$  の正射影ベクトルは  $X\hat{b}$  となる

# 推定された回帰直線の性質

## 最小2乗法で推定された回帰直線が満たす性質

1. 推定された回帰直線は $(\bar{x}, \bar{y})$ を通る
2.  $\sum_{i=1}^n e_i = 0$  (残差の和は0)
3.  $\sum_{i=1}^n e_i x_i = 0$  (残差と説明変数  $x$  の積和は0)  
残差と説明変数のベクトルは直交する



- ベクトル  $e$  とベクトル  $x_0 = [1, 1, \dots, 1]^T$  が直交するため、「2.  $\sum_{i=1}^n e_i = 0$ 」が成立
- ベクトル  $e$  とベクトル  $x_1 = [x_1, \dots, x_N]^T$  が直交するため、「3.  $\sum_{i=1}^n e_i x_i = 0$ 」が成立

# 演習問題

## 線形回帰モデルの最小2乗推定量が

$$\hat{b} = (X^T X)^{-1} X^T y$$

となることを示しなさい。

ヒント:

- 残差平方和  $RSS = (y - Xb)^T (y - Xb)$  は2次式。  
ベクトル  $b$  に対する  $RSS$  の最小化のためには...
- 転置行列の公式:  $(A + B)^T = A^T + B^T$ ,  $(AB)^T = B^T A^T$
- ベクトルの微分の公式1:  $f(x) = a^T x$  のとき  $\frac{df(x)}{dx} = a$
- ベクトルの微分の公式2:  $A$  が対称行列のとき  
 $f(x) = x^T A x$  のとき  $\frac{df(x)}{dx} = 2Ax$